

学内広報

2015.5.25

no.1468



五月祭でお目見えした「めいちゃん神社」企画の「狛めいちゃん」



東京大学
THE UNIVERSITY OF TOKYO

濱田総長時代の6年間を導いた指針

「行動シナリオ FOREST2015」の成果

五神真 新総長就任会見報告

濱田総長時代の6年間を導いた指針

「行動シナリオ」FOREST 2015の成果

1. 学術の多様性の確保と卓越性の追求

国内の主要研究大学との連携体制（**学術研究懇談会 (RU11)**）を構築。研究大学に対する学術研究支援のあり方や、間接経費率の引き上げ、基盤的経費の削減停止・充実を求める提言等を取りまとめ。

国際高等研究所を設立、傘下の機構として数物連携宇宙研究機構 (IPMU)、サステナビリティ学連携研究機構 (IR3S) を附置。

世界トップレベル拠点プログラム (WPI) の進展 (IPMUはWPIの中間評価で唯一のS評価。世界の有力研究機関を支援する米カブリ財団から寄付を受け、基金を設立、**カブリ数物連携宇宙研究機構 (Kavli IPMU)** として体制を強化)。

高度な研究支援人材 (**リサーチ・アドミニストレーター (URA)**) の配置、URAスキル標準の策定、専門研修プログラムの構築、トライアルの実施。URA推進室の設置。

「最先端研究開発支援プログラム (FIRST)」、「博士課程教育リーディングプログラム」、「センター・オブ・イノベーションプログラム (COI)」等、**大型プロジェクト採択後の活動支援**。

ウェブサイトを活用した学術情報の国際発信力の強化。特設コンテンツ「**UTokyo Research**」により、研究成果を国内外に積極的に発信。

国際研究ハブ拠点 (学内81拠点) による国際的プレゼンスの向上。

2. グローバル・キャンパスの形成

海外のトップ大学や有力大学等との**戦略的パートナーシップの構築**を推進。

東大フォーラム (UTokyo Forum) の開催等を通じた戦略的な国際連携・発信の強化。

国際発信のインフラ整備 (中国・北京、インド・バンガロールに事務所を設置し、韓国・ソウル国立大学との間に相互に事務所を設置。リクルーティングや広報活動の推進、海外での留学説明会の増加)。

休学期間中における**外国の大学での取得単位の認定**を制度化。

世界の有力大学との全学交換留学や国際短期プログラムを制度化し、**学生の海外派遣・受入プログラムを拡充**。

海外留学に関する情報提供・相談を行う「**Go Global 海外留学情報室**」を開設。

海外留学を経済的に支援する「**Go Global 奨学基金**」を開設。

英語で学位の取得できるコースの拡充 (学部初のコースである PEAK (Programs in English at Komaba) や GSC (Global Science Course) の開設、大学院コースの倍増により、計44コース)。

英語による授業科目数の増加 (2009年度比で3倍以上に増加)。

外国人留学生受入増加を目指した情報提供、経済的支援の拡充。留学生・外国人研究者用宿舎を拡充整備。東京大学国際交流イベント企画コンテストを実施。

「**スーパーグローバル大学創成支援**」事業を活用し、国際化を強化。

3. 社会連携の展開と挑戦 — 「知の還元」から「知の共創」へ

価値創造型の共同研究計画スキームである「**Proprius21**」、「**Global Proprius**」等による国内外企業との共同研究の創出。

(株) 東京大学TLO、(株) 東京大学エッジキャピタル (UTECH) との連携による、海外特許の戦略的取得、技術移転活動の促進及び大学発ベンチャーの支援。

更なるイノベーションの創出、より創造的な産学連携を推進するため、**産学連携本部を改組**「イノベーション推進部」、「知的財産部」の2部体制)。

社会連携を組織的に推進する事務組織として**社会連携部を新設**。

伊藤国際学術研究センターの開業。

「高校生のためのオープンキャンパス」、「東大の研究室をのぞいてみよう!」プログラム、プロモーションビデオの作製など、**高校生向けアウトリーチの推進**。

東京駅前JPタワー内のインターメディアテック (IMT) に「**IMTブティック**」をオープン。

英文略称の改定 (UTokyo)、ロゴマークの統一 (UTokyoマーク) 等、**ブランド戦略を推進**。

大規模公開オンライン講座 (MOOC: Massive Open Online Course) でのコース配信 (Coursera: 4コース、edX: 2コース)。

公開講座、EMP、グレーター東大塾等により、**社会人対象のエクステンション教育**を推進。

4. 「タフな東大生」の育成

教育の質の向上を目指した「**学部教育の総合的改革**」を推進。

役員会において「学部教育の総合的改革に関する実施方針」を議決。「学部教育の総合的改革に係るアクションリスト」の実施。秋季入学の拡充・推進、「**部局別改革プラン**」の策定。

全学部での新たな学事暦「**4ターム制**」の導入を決定。教育の国際化、実質化、高度化に向けたカリキュラム改革に着手。

学部段階において**科目ナンバリング制の導入** (平成29年度〜) を決定し、カリキュラムの構造化を促進。

学部後期課程で**GPA (Grade Point Average)** を活用した学習支援を開始。

英語によるアカデミック・ライティング (ALESSおよびALESA) の充実、日本語と英語に加え、もう1つの外国語運用能力に秀でた人材を育成する特別プログラム「**トライリンガル・プログラム (TLP)**」を開始。

国際社会における指導的人材の育成を目的とした特別教育プログラム「**グローバルリーダー育成プログラム (GLP)**」のカリキュラムの本格始動。

「**体験活動プログラム**」、初年次長期自主活動プログラム「**FLY Program**」により、学生の多様な学びを促進。

推薦入試の導入を決定し、「東京大学推薦入試のアドミッション・ポリシー」を策定。

濱田純一第29代総長のもとで2010年3月に策定された将来構想「東京大学の行動シナリオ FOREST2015」は、我々教職員が活動する際の確かな指針となってきました。公表からまる5年。そのシナリオはどれだけ実行されたのでしょうか。ここで、「行動シナリオ」に沿ってこれまで全学で実行してきた取組みの数々を、10の重点テーマ別に確認してしっかりと振り返り、始まったばかりの新しい6年間の準備を整えることといたしましょう。

5. 教員の教育力の向上、活力の維持

「東京大学の **ファカルティ・ディベロップメント (FD)** の基本方針」を策定。

新任教員のための **ファカルティ・ハンドブック** を作成。

FDに関するポータルサイト「**東大FD.COM**」を構築、教職員向けFDビデオの制作。

教員評価の制度設計と適切な運用。

教員の業績に関する情報公開の推進。

大学教員を希望する大学院学生を対象に、授業力向上を目指すための「**フューチャーファカルティプログラム**」を実施。

ティーチング・アシスタント (TA) 制度や**TA育成プログラム**の充実と量的拡大。

少人数のチュートリアル教育「**初年次ゼミ**」の実施。

人件費や研究費の補助を行い、**女性研究者の雇用を促進**。

外国人教員の教育・研究環境の向上の一環として、規則等学内文書の英文化を実施。

教授 (特例) ポスト制度やクロス・アポイント制度等、「教員の新たな人事制度の取扱い」を定め、若手研究者のポスト確保など教員組織の活性化を推進。

6. プロフェッショナルとしての職員の養成

人材育成の役割・機能分担等を明確にするため、「東京大学職員の人材育成の推進体制に関する基本方針」を制定。

教職協働を推進するため、空・本部事務組織の見直し・再編。

教育支援、研究推進、組織運営など業務系統の共通単位毎の専門性を高めていくための「**業務レベル表**」を策定。

幹部職員セミナー、女性職員キャリアセミナーの開催。

職員が実力本位で評価・処遇され、活躍の機会を柔軟に提供するための方策の一つとして、「**次世代リーダー育成研修**」を実施。

管理職登用において、推薦制を導入するなど、幅広く優秀な者を登用する方式を導入。

職員が米国大学院に留学し、大学経営等に関する修士の学位を取得する「**米国大学院留学制度**」を導入。

業務改革の継続的な推進、提案業務の全学的展開。

「情報システム人材に関する強化・育成体系」の実施による**ICT人材の育成**。

教室系技術職員が有する専門的知識、技術等を最大限活かし、全体の資質の向上、ひいては、教育研究能力の一層の向上に資するため、**総合技術本部**を設置。

7. 卒業生との緊密なネットワークの形成

オンラインコミュニティ (TFT) への登録者数の増加。特典サービスメニューの拡大や希望する在学生にアカウントを付与し、「TFT学生会員」として登録を促進。

東京大学校友会 (旧: 赤門校友会) 登録団体数の増加。

卒業生向け生涯学習プログラム (「東大ワールドカフェ」、「グレーター東大塾」、「東大モール」、「東大ベンチャースクエア」) の実施。

「海外大学院留学説明会」や「体験活動プログラム」企画提案など、学生に対する**キャリア支援**の実施。

「さつき会奨学金」「東大生海外体験プロジェクト」「スポーツ振興基金」等、**卒業生による経済的支援プログラム**の充実。

周年卒業生によるリユニオン学年会をホームカミングデイにて実施。

地域同窓会の活性化に向け、国内外の同窓会に総長・役員が参加。**全国47都道府県すべてに同窓会**を設立。

会報誌「**東大校友会ニュース**」を学外向け広報誌「淡青」と併せて卒業生へ送付。

海外同窓会ネットワーク拡充を目指し、海外在住卒業生同窓会設立を支援。

8. 経営の機動性向上と基盤強化

寄附メニューの多様化等、**東大基金の充実・強化**。安定的な運用益の確保。

採用可能数の柔軟化による若手教員採用枠の確保、年俸制助教に係る採用可能数の財源化。

旅費業務の外部委託、リバースオークションの導入など、コスト管理による経費と資源の節減。

施設修繕準備金制度による、既存施設機能の健全な維持・向上。

ハウジングオフィスの設置、宿舍入居申請オンラインシステム (OSTA) を構築・運用等、滞在施設の充実・利便性向上。

「**情報システム戦略**」を策定し、データ分析環境の整備に着手。

学務システム統合化に向けた、学務業務の調査分析・仕様策定。

TSCP (東京大学サステナブルキャンパスプロジェクト) に基づく全学的CO₂削減の推進。

教育研究の継続と温暖化防止を両立する節電対策を実施し、社会に率先する大幅な節電目標を達成。

9. ガバナンス、コンプライアンスの強化と環境安全の確保

総長を本部長とする「臨時教育改革本部」を設置するなど、全学的な意見調整と迅速な意思決定を両立する**機能的な組織運営**。

本部に置かれる組織の整理・見直し、業務のスリム化・効率化。

自律的な組織見直しのため、全学センターの点検・評価等を実施。

本部組織にとどまらず、各部局にも危機管理担当教員を配置するなど、**大学全体として危機管理体制を充実・強化**。

法務課の設置、「東京大学コンプライアンス基本規則」の制定等による**コンプライアンス体制の充実・強化**。

「研究倫理アクションプラン」を策定、研究倫理推進室の設置による**研究不正の防止、倫理教育の徹底・推進**。

「東京大学防災対策」の改訂、「震度5弱以上の地震における初動の行動指針」の制定、「東京大学被災建物応急危険度判定士制度」の創設、「災害対策ポケットマニュアル」を作成するなど、**災害時に有効な防災対策の検討・実施**。

10. 救援・復興支援など日本再生に向けた活動の展開

東日本大震災に関する**救援・復興支援室**を設置。

岩手県遠野市に**遠野分室、遠野東大センター** (TTC)、大槌町に**大槌連絡所**を開設。

救援・復興にかかる本学のプロジェクト (登録プロジェクト) への支援を推進。

被災地自治体と協定・覚書を締結、被災自治体の復興会議等に参画し、復興計画の助言等、自治体のニーズに対応した組織的な取組を推進。

学生・教職員一体の「**東京大学ボランティア隊**」、学生による「**学習支援ボランティア**」を被災地に派遣。

「FLY Program」、「体験活動プログラム」において、複数の学生が被災地機関でのインターンシップに参加。

学生のボランティア活動支援のため、「**ボランティア活動支援金制度**」を創設。

(次ページにつづく)



「行動シナリオ」を振り返って

FOREST2015

目指したのは全体が動く構造改革

2009年4月、総長に就任した私は、6年間の任期中における大学運営の基本姿勢として、「森を動かす。世界を担う知の拠点へ」と題する所信を公にしました。高度で多様性に富む東京大学の知の営みを鬱蒼とした森に譬えながら、国立大学法人化の精神と仕組みを踏まえてさらに大きく発展させていく決意を述べたのです。この「森を動かす」という言葉には、個々の部分にとどまらず全体の構造改革を目指したいという思いを込めました。そして、2015年3月に至る私の任期中に、何を指し、何を行おうとしているのかを明らかにするために作成したもの、それが『行動シナリオ』です。

2010年4月にこの『行動シナリオ』を公表して以降、学内外の幅広い理解と協力の下、2015年に向けた「行動シナリオ」の具体化を図りつつ、進捗状況を適時に検証し、計画-実施-評価-対処 (PDCA) のサイクルを稼働させていくことを通じ、その目標を最大限達成できるよう、毎年度のフォローアップを実施してきました。10項目の重点テーマにわたる全250に近い取組事項に関して、一つ一つエビデンスに基づき進捗状況を点検し、成果や効果のあった取組、改善・充実すべき取組などの検証を経て、シナリオの最終ゴールに向けての具体的な対処を決定し、それらについて、執行部はもとより、全学で共有するという作業です。

私の総長任期が満了する2014年度は、「重点テーマ別行動シナリオ」の最終的な達成状況のフォローアップを行い、「部局別行動シナリオ」の達成状況とあわせて、その結果を報告書*として取りまとめました。本報告書は、2015年度以降の東京大学の在り方の検討等に資するため、いわば「東京大学全体としての自己点検・評価報告書」として学内外に広く公表するものです。

研究に関しては、**国際高等研究所**の拡充、**リサーチ・アドミニストレーター (URA)**の積極的導入による研究支援体制の充実など、国際的競争力を持つ卓越した研究のための環境整備を推進してきました。東京大学の国際的評価のさらなる向上に向けては、大型プロジェクト等の支援に一層努めるとともに、国際的な研究ネットワークを強化しつつ戦略的な学術推進支援体制の充実が必要です。

教育に関しては、これまで、**PEAK** (Programs in English at Komaba) を含め、英語のみで学位を取得することができるコースの拡充、**FLY Program** (初年次長期自主活動プログラム)の創設、学部学生の体験活動の推進、多様な学生構成の実現と学部教育のさらなる活性化を目指した**推薦入試**導入の決定など、様々な改革を推進してきました。特に、平成25年度に役員会決定とした「学部教育の総合的改革に関する実施方針」に基づき、「教育の国際化」、「教育の実質化」、「教育の高度化」という3つの柱に沿って「**よりグローバルでよりタフな**」人材を育成するため、**4ターム制**導入に向けた全学的準備を進めてきました。これは、学事暦というまさしく大きな枠組みを変えることになりました。この4月からは4ターム制やカリキュラム改革、推薦入試の導入を始めとする新しい制度がスタートします。今後はさらに大学院改革につなげるなど本格的な展開が期待されます。

大規模公開オンライン講座への参加など「**知の共創**」を掲げた社会連携活動、戦略的な国際連携への取組、教員組織の活性化に向けた新たな人事制度の創設、事業等の見直しや経費節減による効率的な管理運営など進み、『行動シナリオ』の実現に向けた数々の取組が着実に実を結びつつあることを実感しています。

構成員の多様化ははまだ途上段階

学生の国際的な流動性の強化など教育のグローバル化への歩みは大きく進みはじまりましたが、留学生や外国教員の増加など、**グローバル・キャンパスの形成**、学生・教員構成の多様化の実現に向けては、まだ途上にあります。特に、**男女共同参画**、女性の活躍推進への取組の遅れについては、女子学生や女性教員の増加、女性管理職の積極登用などについての抜本的な対策が必要と考えています。大学としての将来の競争力を高めるうえで、多様性のメリットを十分に活用することは大きなアドバンテージとなり得るはずですが。

また、コンプライアンスに関しては、研究倫理の問題が少なからず明らかになっていることをきわめて重く受け止めています。再発防止のため、「**高い研究倫理の精神風土**」を本学にお

第29代総長

濱田 純一



いて揺ぎないものとするとともに、URA制度のさらなる整備など、研究体制の組織的改革も進める必要があります。研究倫理の確立なしに社会的な信頼の維持・回復は図れません。

2011年、**東日本大震災に関する救援・復興活動**の推進について、その重要性と継続的に進めること必要性を明示するため、新たに10番目の重点テーマとして設定しました。被災地域の本格的な復興までには依然として課題が山積しています。東京大学としては、復興への継続的支援の重要性を再確認しつつ、引き続き、学生の体験活動や教員の専門性を生かしながら、被災地のニーズに即した支援を推進しなければなりません。

世界的な大学間競争が激化する中で、教育力と研究力のさらなる向上を通じて、東京大学の存在意義や価値を確固たるものとし、豊かな構想力を備えた「**世界を担う知の拠点**」としての社会的使命を果たすこと。そのために全学が一丸となって目指すべき方針、とるべき行動を総合的に示すものとして『行動シナリオ』を策定し、推進してきました。この『行動シナリオ』には「森を動かす」という私の初心にちなんで「FOREST2015」という名が付けられています。「森は動いたか?」との問いに対しては様々な評価があるでしょう。しかし、間違いなく前に進んでいくための一歩が踏み出され、**東大の知の森は未来に向かって確実に進んでいく段階まで動いた**と自負しています。

東京大学の教職員の皆さんには、日々の教育研究活動や業務の遂行を通じて、『行動シナリオ』の推進にご尽力いただいたことに感謝するとともに、引き続き、次代の東京大学の発展に尽くしていただきたいと願っています。

東京大学は、その教育研究の水準をさらに高めていくことを通じて日本社会の発展に貢献し、**人類の幸福に寄与**していくことが変わらぬ使命です。これまでのご支援に感謝申し上げますとともに、さらに大きく飛躍しようとしている東京大学に、引き続きご支援、ご鞭撻をお願いいたします。

* 近日発行の報告書『東京大学の行動シナリオ FOREST2015の成果 (現状と課題2009-2015)』。問い合わせ：本部評価・分析課 (内線20752)



就任記者会見でわかった 新総長と東大の今後 に関する12のこと

「東京大学ビジョン2020」は 今年度前半に策定される

会見の席上、総長は、東京大学がどんな姿を目指すのかを教職員が共有するための「東京大学ビジョン2020」を、「所信」をベースにして、遅くとも今年度前半のうちに策定すると声明しました。秋にはこの6年間の方向性が示されそうです。

早急に取り組むべき 主な施策が3つある

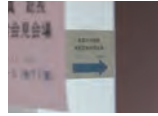
総長が会見で一つ目に挙げたのは、「学生の主体性を刺激する世界最高の学びの場」の創設。4学期制、初年次ゼミナール、体験活動プログラム、推薦入試など、濱田前総長が進めた学部教育改革を定着させるという決意が語られました。二つ目は、「国際卓越大学院」の創設。「知のプロフェッショナル」輩出のため、修士・博士一貫の学位プログラム制大学院コース創設を表明した総長は、その時期を記者に問われ、第三期中期計画の大学運営改革とタイアップする形で準備すると答えました。三つ目は、「知の協創の世界拠点」の創設。教員、学生、社会人が世代を超えて深く混ざり合っていく「本気の産学協働」を強調しました。

推薦入試で求めるのは たとえば一つのことに 没頭する学生

推薦入試で求める人材を問うた記者に、総長は「たとえば、何か一つのことに非常に没頭するタイプは東大の入試が不得手かもしれない。従来入試システムにはまらない優秀な学生に来てもらうには推薦入試が役立つかもしれませんね」と答えました。

過去を振り返るより いまから何を作るかに 目を向ける

昔のほうが研究するための状況がよかったと思うかという問いには、「研究者というのは過去を振り返らないんです。昔やった研究が評価されなかったことをどうこうするより、いまだに新しいものをつくらうかということを考える。昔といまを比較してどうこうするという発想は普段もっていません」と総長。



4月17日(金)、伊藤国際学術研究センターにおいて五神真第30代総長の就任記者会見が行われました。五神総長は、より強い東京大学とするために何をすべきか、運営や経営の在り方をどうすべきか等をまとめた骨子として10項目の「所信」(本誌1467号に全文掲載)を公表、報道陣との質疑応答と懇談会も行いました。参加できなかった皆さんのために、当日現場でわかったことを抽出して紹介します。

「多様性」が非常に重要な キーワードとなる

総長は、「所信」の10項目のうち4項目に関わる大切なキーワードとして、「卓越性」に加えて「多様性」があることを強調。「多様性を活力とする協働」という表現で、地球規模の課題解決に取り組んでいくという東京大学の使命に言及。懇談会では、画一化ではなく多様性によって人類社会を強靱なものにしなければならない、との認識も示していました。

若手雇用の問題は 考え方の切り替えで解を出す

若手研究者の雇用の財源について記者から問われた総長は、「考え方を切り替えることで解は出てきます。いつ雇用がなくなるかわからない状態で結果的に20年働くのと、最初からテニユアでと言われて20年働くのとでは雇用の価値が全然違う。そういう発想にたつてシステムを点検すると財源問題とは別にやるべきことがわかるはず」とコメント。安定性と流動性が両立する人事制度を実現し、若手にとっての「研究する人生」の魅力を回復させ、優秀な若手研究者をサポートする決意をあらためて伝えました。

久しぶりに東大の 入試問題を見ていた

総長就任を機に世界史の問題を見てみたところ、単なる知識だけでは太刀打ちできないような問題が工夫されており、様々な制約があるなかで相当なレベルにあると感じたとか。

記者会見の時間は 予定をオーバーしていた

所信説明と質疑応答からなる就任記者会見は、当初の予定を大幅にこえて終了。総長として初のメッセージを出す五神先生の熱意が伝わる会見となりました。

鯖江発の眼鏡を愛用

眼鏡フレームに3本のラインを見て取った旧知の記者が「シャルマンですか? 医療分野にも進出する福井県鯖江市のメーカーで、安倍首相が工場見学して話題になりました」と質問。総長は「知りませんでした、そうなんですか。日本の地方パワーを象徴するような会社ですね。知ってて愛用している、と言えよよかったかな」と笑顔で返しました。

教職員はもう一度 「所信」を熟読すべき

「東京大学ビジョン2020」公表まではこの日の会見でも配られた「所信」こそが総長の思いを汲むための手がかり。「学内広報」1467号をもう一度読み返すべきなのは明らかです。

自分とは違うタイプの人と 話して新しいことを 吸収するのが好き

プロフィールをチェックした記者から学外に出た経験がないことを指摘された総長は「東大の中にこもっていたという意識はありません。自分と違うタイプの人と話することが私はとても好きなんです、そういう場面で新しいことを吸収できることのほうがむしろ大事な事かなと思っています」とコメントしました。

淡青色のタイを着用

総長予定者選出直後の会見(2014年11月27日)で締めていたのはえんじ色のネクタイ(写真)でしたが、今回総長の胸元を飾ったのはライトブルーのタイでした(淡青色はもちろん本学のスクールカラーです!)

教養教育の現場から

第9回

リベラル・アーツの風

創立以来、東京大学が全学をあげて推進してきたリベラル・アーツ教育。その実践を担う現場では、いま、次々に新しい取り組みが始まっています。この隔月連載のコラムでは、大学のすべての構成員がぜひ知っておくべき教養教育の最前線の姿を、現場にいる推進者の皆さんのレポートでお届けします。

持続可能な社会を創る人材の育成に向けて

／再生可能エネルギー実践講座、グリーンパワー大学2014@東京大学

教養教育高度化機構 環境エネルギー科学特別部門長
先端科学技術研究センター教授

瀬川 浩司



エネルギーミックスの議論が進む

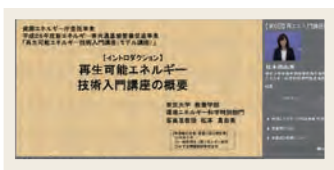
我が国の長期エネルギー需給見直し（いわゆるエネルギーミックス）に関する議論が、活発に進められている。東日本大震災に伴って起こった福島第一原子力発電所事故でエネルギー供給戦略に見直しが迫られる一方、国連気候変動パリ会議（COP21）を控えて低炭素社会の構築に向けた積極的取り組みも求められており、日本のとるべき道はどの方向に進んでも険しい。そもそも人類が引き起こした環境とエネルギーの問題は、相互に密接な関係があり、人間や国家の安全保障を考えるうえで最重要課題であるが、どちらも簡単に回答が見つかるものではない。日本では、僅か15年先の2030年のエネルギーミックスの議論でさえ長い時間を費やしているし、このエネルギーミックスが政策決定されたからといっても、その実現が担保されるわけではない。また、2030年よりさらに先の長期展望を見据えて環境とエネルギーの問題解決を考えるとき、より一層不透明な状態に陥っていることは否めない。こうした中

で、大学が果たすべき役割は何なのか。

環境とエネルギーの課題解決を担う人材の育成

日本学術会議東日本大震災復興支援委員会エネルギー供給問題検討分科会は、昨年9月に報告を出し本年2月には国際シンポジウムを開催した。その中で、日本が抱える課題解決に向けて「政治」「経済」「科学」「技術」「リスク」などを俯瞰して総合的に意思決定する仕組みや継続的な研究の重要性とともに、これらの課題解決を担う人材の育成が極めて重要であることを指摘している。本部門では、このような問題意識の中で、地球規模の課題解決に必要な分野横断的・学際的な総合力を養うための教育を微力ながら進めている。なかでも、再生可能エネルギー関連の教育に力を入れ、さまざまな講義を開講する一方、一般公開シンポジウムの開催など外部への情報発信も活発に行っている。2014年度は、前期課程で開講している全学自由研究ゼミナール「再生可能エネルギー実践講座」の内容に沿ってe-ラーニング「再生可能エネ

ルギー技術入門講座」を作成した。さらに、再生可能エネルギーに関する知識体系及びスキル標準を作成した（現在経済産業省のHPで公開中）。また、2014年12月には、「グリーンパワー大学2014@東京大学」（経済産業省と共同主催）を開催した。このシンポジウムは、再エネ導入を推進している様々な分野の講師を迎えて行ったもので、学内外から500名を超える参加があった。『地域ビジネスと経済の視点におけるグリーンパワー』（モデレーター：小谷真生子氏）などのパネル討議や、再エネ分野の人材育成に関わる基調講演などが行われた。また、グリーンパワーを取り入れた地域活性化、都市生活、事業・金融をテーマとする踏み込んだ講義や質疑応答が行われた。最終セッションでは、「グリーンパワー大学2014@東京大学」の総括となる全員参加のワークショップが行われた。今年度以降も、このような取り組みを通じて2050年より先を見据えた環境とエネルギーの課題解決に向けた幅広い人材育成を進めていく予定である。



←e-ラーニング「再生可能エネルギー技術入門講座」、前期課程で開講している「再生可能エネルギー実践講座」の内容に基づいて作成されている。

「再生可能エネルギー技術入門講座」

第1回	エネルギー総論
第2回	再生可能エネルギー政策
第3回	太陽光発電の基礎知識と事業
第4回	風力発電の基礎知識と事業
第5回	木質系バイオマス発電の基礎知識と事業
第6回	小水力発電の基礎知識と事業
第7回	地熱発電の基礎知識と事業
第8回	再生可能エネルギーと系統連系地熱発電の基礎知識と事業
第9回	再生可能エネルギー事業とファイナンス
第10回	導入事例の紹介



↑2014年12月に開催した「グリーンパワー大学2014@東京大学」の会場風景。学内外から500名を超える参加があった。

あちこちそちこち
東京大学 第2回

本郷・駒場・柏以外の本学を現場の教職員が紹介

農学生命科学研究科
附属牧場の巻農学生命科学研究科 助教
李俊佑

馬、牛、山羊、豚等を比べながら学ぶ場



牧場・動物飼料生産で使用されるトラクターとともに。

馬、牛、山羊そして豚を間近で見られる場所ってご存知でしょうか？ しかも運がよければ馬に乗れるかもしれませんし、搾りたての牛乳が飲めるかもしれません。もっと運がよければ仔山羊と仔豚も抱けるかもしれません。

ここは日本国内で唯一、馬、牛、山羊、豚等多種類の家畜を飼育して学生の教育に資している施設です。これらの家畜を利用して、動物の繁殖学、栄養学、行動学等に関する先端的な研究も行われています。また、ICT関連の設備が整備され、東京大学の各キャンパスとの間をつなぐ遠隔授業も実施可能となっています。

動物は種類によって食性や習性がまったく異なります。同種の家畜においてもかなりの数の品種があり、品種によって習性も異なり、また性別によっても習性や行動が違います。学生達が当牧場において異なる家畜を用いてその接し方、扱い方、飼養管理、そして種に固有の疾病等を比較しながら勉強することができます。

さらに、畜産物の安全・安心や、現在世界的にも大きな問題になっている家畜の感染症等に関する理解を深めることもできます。附属牧場は約36haで、放牧場や牧草地の広がる緑豊かな場所です。

このように多くの動物を比較しながら勉強できる素晴らしい場所が東京大学にはあります。そこが笠間焼で有名な茨城県笠間市常磐自動車道岩間ICから800m離れた場所にある農学生命科学研究科附属牧場です。



1. 乗馬実習の指導。
2. 黒毛和牛と乳牛ホルスタイン。
3. シバ山羊の親子（仔山羊が親山羊の背中に乗っかってご満悦!）。
4. 仔豚のオッパイの定位置は生後間もなく決まります。

<http://www.bokujo.a.u-tokyo.ac.jp>

留学生さん
いらっしやい!

第23回



海を越えて東大にきた学生に聞きました。



台湾

林沛希さん

リン・ハイキ Pei-Hsi Lin

総合文化研究科広域科学専攻
生命環境科学系 修士2年

台湾出身。写真撮影と料理が趣味。日本語表現に日本人の繊細さを見出し、安定した社会に日本人の忠節を感じる林さんの関心は、人の心の科学的解明です。

Q. どうして日本(東大)に来たの?



日本人の友達がいる、日本語ができたらいなと思っ勉強を始めました。国立台湾大学で日本文学の勉強をしていて、交換留学で1年日本にきました。その時に東大の先生が書いた心理学の本を読んで感銘を受け、東大進学を考えました。ちなみに、母校は旧帝国大学だったので、東大は懐かしい感じがしましたね。

Q. 修士課程で何を研究していますか?

「嫉妬の性差」というテーマで進化心理学の研究をしています。アンケート調査を行っていますが、回収率が1割程度なので悩んでいます。将来は台湾で科学コミュニケーターになり、心の科学の話を楽しく伝えていきたいです。



Q. 日本(東大)で困ったところは?



合格通知が来てから学期が始まるまで2週間しかなく、準備が大変でした。特に部屋探しは苦労しました。現在、少し不便だなと思っているのは、駒場周辺に飲食店が少ないことです。

Q. 日本(東大)の好きなところは?

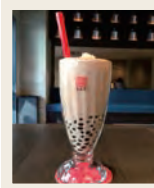
東大生は勉強熱心で、留学生にとって励みになります。東大は研究資源が充実していて勉強には最適で、留学生サポートもしっかりしています。台湾留学生会の活動も盛んです。



Q. 台湾のいいところを教えてください!



ドリンクスタンドでは70~80種類ぐらいの飲み物が売っていて便利です。写真は台湾の代表的な飲み物のタピオカミルクティーです。



協力：国際センター本郷オフィス 制作：本部広報課

訂正とお詫び／前号の本欄の質問、「ネパールのいいところは？」は正しくは「インドネシアの～」でした。訂正し、お詫びいたします。

ワタシのオシゴト 第111回

RELAY COLUMN

教養学部等総務課
数理学総務係・係長

中川 健太郎

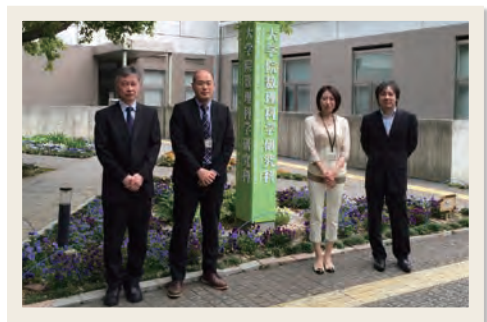
いろいろな人に支えられています



数理学研究科棟の正面玄関にて。

大学院数理学研究科の事務は教養学部等事務部に所属し、総務係と教務係の2係があります。私が所属する総務係は、数理学研究科に関する総務、人事、勤怠管理、旅費、大学運営費の管理・執行、外部資金の受入・執行、施設管理、日本学術振興会関係など、多岐に渡る業務を担当しています。総務係は22名の大多所帯ですが、特に19名の有期雇用職員の皆さんの力が大きく、日々助けられています。

さて、ご存じない方がいるかもしれませんが、数理学研究科は群馬県沼田市に「玉原国際セミナーハウス」という施設を運営しています。国産材の丸太を組み上げた素晴らしいログハウスです。主に研究科の教育研究・社会連携を目的に使用していますが、学内の方の利用も可能ですので、ぜひご利用ください。近隣の玉原湿原ではミズバショウをはじめ豊かな生態系を観察することができます。



環境美化チーム整備の「数理花壇」の前で。

得意ワザ：マニュアル車で峠道を走る
自分の性格：マジメなだけが取り柄です
次回執筆者のご指名：国井孝浩さん
次回執筆者との関係：同期です
次回執筆者の紹介：同期の星☆です

Crossroad

産業界と大学がクロスする場所から、産学連携に関する“最旬”の話題や情報をお届けします。

産学連携本部

第114回

グローバルアントレプレナー育成
促進事業 (EDGEプログラム) とは?

グローバルアントレプレナー育成促進事業 (EDGEプログラム) は、文部科学省が我が国におけるイノベーション創出の活性化のため、大学等の研究開発成果を基にしたベンチャーの創業や、既存企業による新事業の創出を促進する人材の育成と関係者・関係機関によるイノベーション・エコシステムの形成を目指し平成26年度から開始した人材育成事業です。

東京大学では、創造性教育を提供する「i.school」(主宰:「知の構造化センター」)と起業教育を全学的に展開する「産学連携本部」、医療分野での「医学系研究科」が共同主体となった3つのプログラムを提供しています。

産学連携本部では、研究者を受講者として、自らの研究成果を基に、数回にわたる集中勉強会と専門家によるメンタリングを通じて、事業化構想を練り上げるプログラムを提供しております。昨年度は、東大研究者13名(9チーム)、企業研究者7名(4社、5チーム)が参加し、ブラッシュアップした事業化構想を、最終的には米国シリコンバレーにてベンチャーキャピタリストの前で発表し、リアルビジネスとしての可能性評価を受ける経験をしました。メンターを担当したベンチャーキャピタルが引き続き事業化に向けて支援することになったチームや民間ベンチャーキャピタル主催のコンテストにて優秀賞を受賞したチームもあります。受講者に対するアンケート調査から、受講者が格段に成長したことが分かりました。研究者の皆様の本年度プログラムへのご参加をお待ちしております。



シリコンバレー研修での現地投資家の前で事業化構想の発表。

EDGE
PROGRAM

<http://edgeprogram.jp>

<http://www.ducr.u-tokyo.ac.jp/>

インタープリターズ・ バイブル

第94回

生産技術研究所 講師
教養学部附属教養教育高度化機構
科学技術インタープリター養成部門

川越 至桜

宵の明星とインタープリター

ここ数か月、夕暮れの西の空に一際輝いているモノがあるが、みなさんお気づきだろうか？ 宵の明星、金星である。ここで星と言わなかったのは、金星は惑星であり、星（恒星）ではないからだ。

私は観望会（星を見る会）に関わる機会がよくある（悪友たちに巻き込まれたというのが正確かもしれない）。星や宇宙を好きという人は多く、星柄・宇宙柄も含め何となく綺麗だから好きという人から、科学的なことに興味がある人まで、興味の対象は人それぞれである。そのような観望会参加者に「あれが金星ですよ」と伝え、「明るい」、「綺麗」、「ふーん」といった様々な反応が返ってくるが、中には「都内でも見えるのか!」、「惑星が肉眼で見えるのか!」という人もいます。

都内で金星が見えることを知り、夜空を見上げながら帰っていく参加者。日常生活の中にほんの一端、科学が入り込む瞬間である。金星が見えなくても生きていくことはできるし、日常生活が大きく変わるわけでもない。しかし、少しのキッカケで、宵の帰り道に空を見上げてみたり、ふと「あれは何だろう?」と疑問を抱いたりすることで、世界がほんの少し広がったり、違って見えたりするかもしれない。星や宇宙に限らず、「何か」と「自分」との接点があることを知った時、これまでとは違った世界に一步踏み込めるのではないかな。

インタープリター、自然や文化等と人との橋渡し役となる人を指す単語である。専門的なことをわかりやすく伝えることは、インタープリターとしてももちろん重要である。それと同時に、日常に潜むトピアを伝えられるのも、深い知識があるからこそできるのではないだろうか。人それぞれ何がキッカケになるかは分からない。しかし、自分では当たり前と思っている些細なことが、他の人にとっては新鮮で、新しい世界の入り口になるかもしれないのだ。そう考えると、科学技術インタープリターは、日常と科学技術の世界をつなぐ扉の鍵を持っている人のことなのかもしれない。

宵の明星、今年は8月初旬まで見ることができる。自分が学んでいるその先にはどのような世界が広がっているのか、宵の明星でも眺めながら今一度考えてみようと思う。

科学技術インタープリター養成プログラム
<http://science-interpreter.c.u-tokyo.ac.jp/>

救援・ 復興支援室 より

第48回

本学の救援・復興支援室の最近の状況や、
遠野分室の日々の活動の様子をお届けします

救援・復興支援室の活動(5月～6月)

5月	福島県相馬市「寺子屋」学習支援ボランティア
6月	岩手県陸前高田市「学びの部屋」学習支援ボランティア

ザシキワラシの日常

本部企画課係長(遠野分室勤務)



文：佐藤 克憲

遠野分室のある岩手県遠野市は、同県沿岸南部には1時間前後、同県沿岸中央部の宮古市にも2時間以内で到着できるという地理的特性と、これまで同県沿岸部で繰り返されてきた大津波の度に支援を行ってきた歴史、そして現市長の沿岸部災害時後方支援に対する東日本大震災前からの強い思い入れもあり、今回の震災における被災地の後方支援活動を国や県からの指示を待たずに行い、それが全国的に評価されていることは、本コラムでも折に触れて紹介しているので御存知の方も多いかと思えます。

遠野市では今回の震災の後方支援活動について、手書きの模造紙約80枚や関連写真約15,000枚等膨大な量の記録資料を保存していますが、全国からの視察が昨年までの3年間に約240件、人数にして約2,400人もあり、その後も視察が続いていることや、同市が本年3月に開催された「国連防災会議」の被災地公式視察コースの一部になったこと等を踏まえ、これらの資料を公開し、活動から得た教訓を広く発信するため、本年3月14日、消防署等がある総合防災関係施設「遠野市総合防災センター」の敷地の一角に「3.11東日本大震災 遠野市後方支援資料館」を整備・開館しました。

建物は約45坪ほどの平屋建てで、午前9時から午後5時まで年中無休で開館しており、事前申込不要で自由に見学することができます。遠野市内に復興支援拠点を設けて活動した主な団体については団体ごとのコーナーも設けられ、本学についても活動の写真等が展示されています。被災地での復興支援活動や観光の前後にお時間があれば是非一度同所を訪れ、遠野市や本学等が震災発生以降実際にどのような活動を行ってきたかを知っていただきたいと思えます。

今回もお読みいただき「オアリガトガンス!」。



(左)後方支援資料館全景(国道283号線側から)。(右)本学関係ブース(写真、新聞記事等が展示)。

http://www.u-tokyo.ac.jp/public/recovery/info_j.html
kyuenfukkou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp 内線：21750(本部企画課)

トピックス

全学ホームページの「トピックス」(<http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/topics/>)に掲載した情報の一覧と、その中からいくつかをCLOSE UPとしてご紹介します。

掲載日	担当部署	タイトル	実施日
4月16日	農学生命科学研究科・農学部	「ハチ公と上野英三郎博士像」除幕式	4月16日
4月17日	広報室	五神 真 総長就任記者会見	4月17日
4月23日	史料編纂所	「倭寇と倭寇図像をめぐる国際研究集会」を開催	4月20日
5月8日	国際本部	第1回戦略的パートナーシップシンポジウム開催	4月20日
5月11日	学生支援課	新入生向けスポーツ大会「第2回 駒場運動会」を開催しました	4月22日～28日
5月12日	学生支援課	平成26年度初年次長期自主活動プログラム(FLY Program)活動報告会等の開催	5月9日

お知らせ

人事異動情報など全学ホームページ「お知らせ」(<http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/notices/>)・東大ポータル等でご案内しているお知らせを一部掲載します。

掲載日	担当部署	タイトル	URL
5月1日	本部人事給与課	人事異動(教員)	http://www.ut-portal.u-tokyo.ac.jp/wiki/index.php/人事異動(教員)
5月20日	広報室	藤田敏郎名誉教授、豊島近教授、木下直之教授が本年春の紫綬褒章を受章	http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/notices/notices_z0508_00006.html



CLOSE UP

平成26年度FLY Program活動報告会を開催

(学生支援課)



学生からの活動報告の様子。



五神総長による挨拶。

5月9日(土)、駒場キャンパス21KOMCEEレクチャーホールにて、平成26年度初年次長期自主活動プログラム(FLY Program)活動報告会が開催され、五神総長による開会の挨拶の後、参加学生から活動報告が行われました。

各報告^{*}は、本プログラムの特徴でもある独自性を持つ多種多様なものであり、これまでの生活とは異なる環境において気づきを得たり、困難に直面しても主体的にそれを乗り越えていく様子は、いずれも聞き応えのある大変魅力的な内容でした。

全活動報告が終了した後、初年次長期自主活動プログラム(FLY Program)推進委員会委員長藤井輝夫教授から現状のプログラム評価に加え、将来的な展望を含めた総括と、南風原理事から閉会の挨拶とともに学内外における関係者の方々からの支援に対する謝辞が述べられ、閉会となりました。

閉会後には、濱田前総長から参加学生へ修了

証の授与と、労いのメッセージが送られました。

引き続き、平成27年度プログラム参加者からの活動計画発表を主眼とした交流会が開催されました。各学生からの発表は、活動に対する期待や不安が混ざり合いつつも、それぞれの意気込みが感じられ、様々な成果が得られることを期待させるものでした。小川教養学部長から活動を開始するにあたっての激励のメッセージが送られ、プログラム参加学生と学内外における関係者の方々との活発な意見交換も行われ、盛会のうちに終了いたしました。

^{*}活動報告の各タイトル 「被災地の教育支援に携わる2つのNPOでの、インターンシッププログラム」「アジアとヨーロッパでのバックパッカー、およびそのための準備」「世界との対話」「日本・欧州での有機農業体験と欧州周遊旅行」「ジェンダー問題を中心として多様な国々の現状を知る」「アメリカでの語学留学と旅行による国際交流、自己の深化、価値観の相対化」「人生を変える休学プログラム!」「世界を旅してみる」

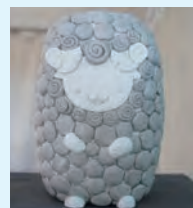
春の紫綬褒章受章 (広報室)

藤田敏郎 名誉教授(先端科学技術研究センター)、豊島近 教授(分子細胞生物学研究所)、木下直之 教授(人文社会系研究科)のお三方が、本年春の紫綬褒章を受章しました。おめでとうございます。

受章記事については、上記「お知らせ」のURLからご覧ください。

表紙について

今号の表紙写真は、5月16日(土)～17日(日)の第88回五月祭で合格通りに出現した企画「めいちゃん神社」にて撮影。神社に鎮座する狛犬ならぬ「狛めいちゃん」です。向かって左に口を閉じた吽形、右には口を開けた阿形の狛めいちゃん。企画は学業成就祈願のお客様で賑わい、絵馬ストラップなどのグッズが早々に売り切れるほどでした。



狛めいちゃん(阿形)

CLOSE UP



プリンストン大学との取組みを発表する吉田直紀 理学系研究科教授。

戦略的パートナーシップシンポジウムを開催 (国際本部)

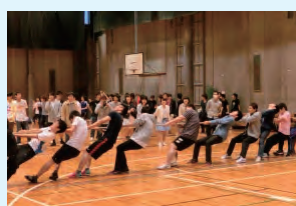
4月20日(月)、「第1回戦略的パートナーシップシンポジウム」が工学部8号館にて開催されました。

本学では、昨年10月に文部科学省「スーパーグローバル大学創成支援」事業に採択されたことを機に、海外の限られた大学との「戦略的パートナーシップ構築プロジェクト」に対する部局と部局間の取組みを国際本部グローバル・キャンパス推進室がサポート役となって進めています。これは「東京大学グローバルキャンパスモデルの構築」の実現のために、総合的教育

改革とともに大きな柱となる取組みです。

本シンポジウムには、約100名の教職員が出席し、この「戦略的パートナーシップ」の主旨について改めて理解を深めていただくとともに、先行して「戦略的パートナーシップ」を進めているプリンストン大学(米)との取組みを始めとして、その他のパートナー大学との間に構築する研究・教育面での多様で特色ある各取組みにおける活動状況と今後の計画について発表の機会を設け、グッドプラクティスを共有しました。

CLOSE UP



ワッショイ! ワッショイ!



クラスの親睦が一層深まりました。

第2回「駒場運動会」を開催

2015年4月22日(水)～24日(金)、27日(月)～28日(火)の5日間にわたり、駒場キャンパスにてスポーツ大会「駒場運動会」を開催しました。当スポーツ大会は(一財)東京大学運動会主催のもと、新入生がスポーツを通してクラス内外での交流を深めることを目的として、昨年度より開催されています。

天気に恵まれ、5日間で綱引き・バスケットボール・リレー・フットサル・バレーボールの5競技を、1日1競技ずつ実施しました。参加者以外にも、クラスの友人の応援に駆けつける学生も多く見られました。5日間で、参加者・観客あわせて、のべ約800名の参加がありました。5競技の中で最も多くの参加者があった綱引きでは、参加者・観客あわせて約300名が参加

(学生支援課)

しました。競技中は参加者のかけ声だけでなく、クラスの友人の応援に駆けつけた学生も大きな声で声援を送るなど、割れんばかりの歓声が響き、体育館が活気に満ちあふれました。

また表彰式では、各競技にて優秀な成績をおさめた参加者に、賞状と副賞が授与されました。ともに参加し、声援を送ったクラスの友人同士で集まって記念撮影を行う様子が印象的でした。

(一財)東京大学運動会は、本学構成員がスポーツに親しむ機会を持つことを目的として、様々なスポーツイベントを開催しています。サッカー・野球等の学内スポーツ大会、本学学生・教職員を対象としたスポーツ大会である「検見川運動会」、運動部による競技講習会など、その種類は非常に多彩です。

「研究倫理教材コンテスト」のお知らせ (研究倫理推進室)

研究倫理推進室では、研究倫理教育の一環として、本学の学部学生を対象にした「研究倫理教材コンテスト」を実施いたします。

各分野の教職員や上級生との交流を通じて学部学生が自ら考え、各研究分野の特色を取り入れた倫理教材を作成することで、不正行為がどのようなものかを実感し、研究倫理意識の向上を図ってもらおうというものです。教材の形態は、冊子でもアプリでも動画でも静止画でも詩でも舞踏でも楽器演奏でも、なんでもOK。優秀作品は東大の研究倫理教材として採用されるかもしれません。

高い研究倫理を東京大学の精神風土にするための一助として、学生たちの積極的な参加を促しましょう。

「研究倫理教材コンテスト」

- 応募資格 学部3～4年生
※3～5名のグループ単位で応募
- 応募期間 平成27年5月12日(火)～8月17日(月)13時
- 最終審査・表彰 平成27年9月7日(月)
※「研究倫理ウィーク」(9月1日～7日)期間中
最優秀賞 表彰・副賞 (5万円相当)
優秀賞 表彰・副賞 (3万円相当)
特別賞 表彰・副賞 (1万円相当)
※学業支援経費として支給
- 審査委員 (5名)
保立和夫先生(委員長/研究担当理事)
ほか4名
- 教材について
各自が所属する学科で現実に起こりうる不正行為(ねつ造・改ざん・盗用)について、教材の中で具体的に表現すること。
完成した教材の媒体は問わない。ただし、最終選考は、審査委員に対し、教材そのもの、または教材の内容を紹介するプレゼンテーションができるよう準備すること。

6月4日(木)
17時から
小柴ホールにて
事前説明会を開催!
お気軽にお越しください

問い合わせ：研究倫理推進課(内線24308)
http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/events/events_20705_00001.html



バングラデシュで考えたこと

早春のバングラデシュとインドを旅してきた。キトロギア (CYTOLOGIA) という雑誌をご存知だろうか。1929年に創刊された細胞遺伝学の欧文専門雑誌である。その国際発信力強化のために論文賞の授与と講演に出向いたのだ。インドは兎も角、バングラデシュのことはあまり知られていない。何しろ私のガイドブックには「混沌の国を巡る—旅人に会わない旅」とあった。短い旅だったので、先達の『インドで考えたこと』のようにはいかないが、バングラデシュのことを少し考えてみよう。私たちが訪ねた2015年は、年明けから野党によるホルタル (ゼネスト) がずっと続き、交通機関への放火があちこちで起きていて、国内旅行はおろかダッカ市内の移動すら難しい状況だった。1971年の独立の際の対立はいまだに深刻で、「黄金のベンガル」を満喫する春の遠出は期待できそうになかった。

ダッカ大学は、春が浅く緑がまだ濃くなり切っていなかったが、ベンガル独特の鮮やかな色彩感覚のサロワ・カミューズやサリーをまとった女子学生でキャンパスは華やいでいた。ダッカ大学の年報には学生数37,064名とある。そこには男女比の記載はなかったが、東京大学の女子学生の割合 (18.7%) *より多いように思われた。2006年にノーベル平和賞を受賞したマイクロクレジットのグラ

*平成26年5月1日現在/学部学生の男女比

ミン銀行も、その活動を支えたのはバングラデシュの女性達だった。今回撮った記念写真を見ても、受賞者の研究室の学生の半分が女性だし、お祝いに駆けつけた彼のかつてのメンターも女性だった。90%がムスリムという国なのに、この女性の社会進出ぶりには驚かされる。

授賞式と講演会は学生と教員で超満員だった。日本で学位を取得した教員も何人か駆けつけくれたようだ。受賞者当人も広島大学で学位を取得している。理学部長も挨拶で大阪大学と共同研究を推進していると語っていた。東京大学の名前が出なかったのは少々残念だが、学术交流を進める上でこうした知日派の存在は大きい。私たちの講演で最も受けたのは、先の戦争の最中であっても (1941-1945)、キトロギアが欧文専門雑誌として敵性語の英語を使い、ドル建てのまま頒布を続けたという件だ。私たちのこうした矜持をしっかりと受け止めてくれるアジアの国こそ、学术交流の相手として相応しいのではなからうか。バングラデシュの与野党の対立がこれ以上先鋭化し、穏やかなムスリムとしての国の歩みが止まってしまわないよう切に願う。

河野重行
(新領域創成科学研究科)